

論壇

就職観に顕著な変化

大学で長く教えていると、「学生の資質や性格は変わりましたか」という質問を受けることが多い。「以前よりもおとなしい学生が増えた」というような返事を予想して質問してくる人もいる。ただ、学生にそうした傾向が見られるともなかなか言い難い。学生にもいろいろなタイプがあつて、多くの学生が同じ方向に変化しているとは言えないからだ。

そうした中で、私がこれまで教えてきた学生の中に顕著な変化が

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

一つ見られる。それは、若い人の就職観である。私が長く教えてきた東京大学の経済学部卒業生は、国家公務員、大銀行、大手商社など、世間的に見て安定した就職先に落ち着く傾向が強かった。就職先に恵まれていたということかもしれないが、途中で転職する人も少なかった。

若者のベンチャー起業

ただ、この5年ほどで、大きな変化が出てきている。大企業などを飛び出して、起業を始める人が少なからず出てきているのだ。大企業を出てすぐに起業するというより、5年から10年大きな企業や役所での経験を積んで、満を持して起業するのだ。

これまでのところ、これらの人

たちらのビジネスはそれなりにうまく回っているようだ。社会的に大きく注目される人も出てきている。興味深いことに、こうしたベンチャー企業には優秀な人材が集まって来るようだ。そうした仕事にやりがいを見いだしているのだろうか。優秀な人が集まってくるので、企業の成長のスピードも速い。

絶対に見えないように見える。絶対に潰れないように見える企業は、数年後に経営危機に陥ったり、外資系企業に買収されたりする。一方で、これまでは聞いたこともなかったような企業が、世の中で大きな注目を浴びることがある。

そうした世の中の変化に、若い人は敏感である。彼らは少し上の先輩を見ながら、自分たちのこれからの方向を模索している。ロールモデルという言葉があるが、自分の将来の目標にするような先輩の姿を探しているのだ。起業した先輩が輝いて見え、それをロールモデルにしようとする人が増えているということだろう。

令和の新しい活力に
起業をするということには、敵

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。

米国などに比べれば、まだ起業の件数は非常に少ない。ただ、私の周りで起業をする若者が増えてきたことは、嬉しいことだと思っ

ている。新しいことにチャレンジする若者がさらに増えていくことこそ、日本が再生するための絶対に必要な条件だと思う。令和の時代を控え、平成の時代に終わりを告げようとしている。昭和の時代はもつと昔の話となった。今の若者が、令和の時代の新しい活力を切り開いてくれることを期待したい。